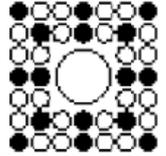


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No. 23

January 31, 2007



BCJA 奨学基金からの御礼

謹啓

BCJA 奨学基金に対して、主旨にご賛同いただき、お振込みの件、御礼申し上げます。BCJA 奨学金が英国留学の一助として、将来の日英関係の架け橋になってくれることを、心から期待したいものです。改めて、御礼申し上げます。

BCJA 会長 西田 宏子

いとき受けた衝撃とも言える感動をもう一度というわけにはいかず、脳の年齢的变化を実感させられたのも事実です。

私のような経験を、一人でも多くの若い有望な方々に経験してほしいという強い希望がある反面、BCJA 奨学制度は風前の灯とも言える状況です。あいかわらず小額の奨学金にもかかわらず、問い合わせも多く、優秀な方々が多数応募されることを考えますと、やはり今後も何らかの形でこの制度を継続・発展させていきたいと考えております。会員の皆様の絶大なご支援を今後ともよろしくお願い申し上げます。

2006 年度 BCJA 奨学生選考について

BCJA 奨学生選考委員長 平 孝臣

2006 年度 BCJA 奨学生は 70 余名の応募があり最終的に 10 名の奨学生を選考いたしました。やはり例年通り、応募された方々全員が非常に優秀で、行間から熱気が感じ取られ、この疲弊した日本社会の中にも、将来の日本を担ってくれる明るく優秀な若者がこんなにいるのだということを再認いたしました。

限られた時間内にこれだけの応募書類にすべて目を通して判断するという作業は実際には大変なもので、本業の仕事の傍らでボランティアとして選考委員を務めるのには少し負担が多いのでは感じています。選考委員の方々には心より御礼申し上げますが、今後選考のあり方なども考えていく必要があるかと思えます。

私自身、20 年ほど前に BC scholar として在英した後いろいろな意味で機会がなく、先週留学後初めて訪英いたしました。数百年の歴史の中で多くの歴史的人物を排出した世界中からメッカといわれる病院での招待講演のためでした。大英博物館の近くの Queen Square という場所にありますが、留学先はこことは違いましたので、当時は恐る恐る外から眺めながら記念写真を撮って、歴史の重みに押しつぶされようになりながら、へーとため息をついたのを覚えています。ましてや将来ここへ足を踏み入れる機会があるなどは微塵にも想像できませんでした。そのような意味で今回の訪英は大変感慨深いものがありました。しかし、あの若

2006 年度奨学金授与者リスト

姓	名	留学先研究機関	研究分野	所属/ 出身校
佐藤	万知	University of Oxford	教育	東京外語大学
Onodera	Akiko	University of Warwick	国際関係	明治大学
小池	克憲	University of Oxford	難民	千葉大学
Taka	Miho	University of Warwick	第三世界	大阪教育大学
中村	祥子	University of Oxford	商学	慶応義塾大学
Miyakoshi	Machiko	University of Bristol	EU 政策政治	御茶の水女子大学
Kurosaki	Miho	University of London	環境工学	慶応義塾大学
石澤	久美子	LSE	国際政治経済	慶応義塾大学
Kimura	Kaori	University of Edinburgh	教育	立教大学
宮寺	恵子	University of Cambridge	獣医学	東京大学

情けない会長から一言御挨拶

BCJA 会長 西田 宏子

あれはもう一年以上前になりました。総会で、次期会長として御推薦頂いたのです。その時は、大いに希望と計画をもっておりましたのに、気がつけば、毎日の仕事の中に、埋没しておりました。会議も、総会も開かない間に、任期が終わろうとしております。

原因は、仕事に大きな変化が訪れ、毎日が体力勝負になってしまったことではないかと思えます。「美術館の改築」という大きな問題の前に、会議と、館内と収蔵品の整備がそれでした。気がついてメールを皆様にお出しし、御意見を伺ったのですが、時すでに遅く、如何ともできませんでした。前任の会長になられた方々が、それぞれお忙しい中を、頑張っておられましたのに、なんとも申し訳なく存じます。

この一年簡に、体力勝負に拍車を掛けたのが、オックスフォードへの短期間の3回の旅でした。一月、五月、十月に三泊五日の講演旅行をして、皆に年を考えると叱られる始末でした。しかしながら、様々なオックスフォードでの生活場面を再体験できたことは、学生時代以来のことでした。また、ST. Hilda'sの構内に宿泊の機会もあって、これもまた学生気分を想い出す事が出来ました。このカレッジは、今年から共学になる最後の女子大で、まだどこか古めかしさを留めておりました。

これらの旅の準備のなかで痛感したのは、美術史のなかでもスライドを使って講演することは出来なくなったということです。機械が皆古くなり、またそれを扱える人がいなくなったことが、その理由でした。こうした傾向は、中国など、スライドを作るのが難しい国で、考古学者がいち早くパワー・ポイントによる発表に変ったことから、美術史でもそれに追従する形で変わってゆきました。大学では学生や助手の方々が、手伝ってくださるのに、美術館では皆機械音痴であり、しかもMACが主流なため、もっていったUSBが使えるのか否かが、常に不安でした。こうしたことは、BCJAの会員の皆様には、恐らく無縁のことではないかと考えます。きっと大笑いされることでしょう。

ところで、これからのBCJAを考え、会を活性化するために会長をお引き受けしたのに、なにも出来なかったことを、大いに反省いたしております。自分でもなかなか動けないのに、どうして参加してほしい、もっと考えて欲しいといえるのだろうかと思ひ巡らしております。お引き受けした時は、なにか楽しいイベントが出来ないか、例えばホームカミングのような、BCJAを楽しむ機会が作れないかと考えておりました。今も、そうした事が、総会と併せて催すことができれば、少しでも多くの会員の方に、御出席を考えて戴けるのではないかと考えております。

遅れた総会を開催し、是非とも皆様にお詫び申し上げ、今後の活動への機会とさせていただきますたく存じます。

2004年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

英国留学エッセイ

明和 美桂

英国サセックス大学大学院での3年間は、今考えると『いくつもの夢を実現する場だった』の一言につきます。

まずは苦手だった英語をいかに克服するかが大きな課題でした。「留学する人はもともと語学ができる」という常識を覆す挑戦でした。修士課程が始まった時には、全くノートも取れなかったほどの英語力で、コースメイトが講義ノートを差し出してくれるという痛ましい状況でありました。それにもかかわらず、自ら5年間貯蓄して、ようやく実現した留学だったこともあり、英語基礎コースから始め修士、そして博士まで進めたことに、私自身でも驚いております。励ましてくれたコースメイトや友人・知人には、大変感謝しております。

博士課程では、学部コースの一つ『比較社会論』のゼミクラスを担当する機会に恵まれました。4クラスとも、イギリス人が9割以上でしたのでもちろん英語での講義です。前述したように英語は不得意な私でしたので、決して滑らかではない話し方でしたが、写真や資料などの補助をふんだんに盛り込んで、飽きさせない授業作りに取り組みました。全16時間、何とか乗り切ったときの達成感は何物にも変え難く感じました。

そんな悪戦苦闘の中で、BCJAの奨学金制度の存在を偶然知り、何かの縁を感じて、締め切り間際に応募したことを覚えています。この作業がイギリスでの生活を振り返るよい機会にもなりましたし、自分の生き方にさらに自信を持つ機会にもなりました。思いが通じてか、奨学金を頂けるといふ知らせを受け取ったのが約1年半前のことでした。

その知らせからちょうど2週間後、今度は国連本部から一通の手紙が届きました。その4ヶ月前に国連本部のインターン制度にアプライしていたのですが、書類選考に通ったという知らせでした。

およそ4年前、旅行者としてニューヨークを訪ねたときの夢が、国連で働くことでした。大学での研究を中断し、2005年1月、インターンとしてではありませんが私はアナン事務総長の元へ飛びました。国連で働く職員のプロフェッショナルリズムに感動し、またイタリア人・アメリカ人・ガーナ人の上司から責任ある仕事を任されることも多くそのことに感激し、世界57カ国から集まってきたインターン達と語り合いました。素晴らしい体験でした。

2005年6月、BCJAの奨学金を活用して、博士課程のフィールドワークリサーチを行うことができました。途上国の経済発展を阻むことなく、しかも環境改善に貢献し、さらには地球温暖化防止にも役立つという『クリーン開発メカニズム(CDM)』について研究していた私は、そのCDMの促進策を追究するため中国へ渡りました。京都議定書の元、世界的に進み始めたCDMが、中国ではまだ機能していない事実を知り、途上国のキャパシティビルディングの必要性を感じました。同時に、本格化する日本の温暖化対策に何らかの形で貢献したいとも考え始めました。

折しも日本にいる父が癌を宣告され、そのサポートのため帰国することになります。順調に回復した父の思いは「温暖化対策で社会貢献することはいいが、日本をベースにやってほしい」ということでした。私の中でも日本人である以上、日本の温室効果ガス削減目標の達成に直接的な形で関わっていきたいという強い思いが生まれていました。実に10年ぶりの就職活動も、蓋を開けてみると想像以上に良い結果となりました。

現在、入社して約2ヵ月になりますが、課長補佐の大役を仰せつかり国内外を飛び回っています。“環境に配慮した形で、途上国の発展を日本から支援し、持続可能な発展をこの目で見ること”。一步一步がその証明につながると信じ、あらゆる方々の支えや、イギリスでの日々を忘れることなく、まずは京都議定書の目標を日本が達成できるよう邁進していきたいと思えます。[2006年2月寄稿]

(2004年度BCJA奨学生、University of Sussex、開発援助)

2005年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[1]

オックスフォードでの一年をふりかえって

増田 史子

まず始めに、この度の留学に際してBCJAより奨学金を頂きましたことに、改めて感謝したいと存じております。私の専攻する国際取引法という分野では、実務上、日本法とは異なる法系に属する英国法と米国法が重要な役割を果たしており、予てから今後の研究の基礎として、イングランドでイングランド法の教育を受けてみたいと希望しておりましたので、このような形でご支援頂いたことをとても嬉しく思っております。簡単ではありますが、オックスフォードでの留学生活について、報告させていただきます。

オックスフォード大学には、他大学のLLMに相当する科目履修型の修士コースとして、英米法圏出身の学生向けのBachelor of Civil Law (BCL)、大陸法圏からの学生向けにBCLに若干の変更を加えたMagister Juris (MJur)というコースがあり、日本法は大陸法系に分類されますから、私は後者に所属しておりました。BCLと併せると総勢約150名という大所帯で、学部や他大学の大学院での法学教育を終えたばかりの方々のほか、法律事務所から派遣されてきた方や民間企業にお勤めのあと入学されてきた方など、多彩なバックグラウンドをもつ学生が、様々な国から集まっておりました。日本人学生も、履修科目こそあまり重ならなかったものの、私のほかに裁判所や法律事務所などから派遣されてきた方数名が同じコースに所属しており、この方々は、イングランド法と日本法との違いについて話しあったり生活情報を交換しあったりと、海外生活が初めての私にとっては、Oxfordで学生生活を送る上で心強い仲間となりました。

BCL/MJurコースでは、学生は大学院生向けに提供される科目の中から単位数に応じて三科目から五科目を選択して履修しますが、MJurの学生に限って、この内の一科目を主に学部生を対象として開講される憲法や契約法、信託法といった基本的なイングランド法の科目で置き換えることが

認められています。私が数ある科目の中から履修したのは、BCL/MJur共通科目からGlobal Comparative Financial Law (比較金融法)、International Law of the Sea (海洋法)、Transnational Commercial Law (国際商法)の三科目と、学部生向けの科目からInternational Trade (国際貿易法)の計4科目でした。学部生対象の授業と大学院生向けの授業の双方を体験することができたわけですが、両方とも授業前の準備として事前に渡されるReading Listに従って相当数の判例や論文を読みこまなければならない点では変わらないものの、学部生向けの授業は、概説的な内容の講義と、少人数で例題に関する討論を通じて理解を深めていくチュートリアルが中心なのに対して、大学院生向けの授業は、大体10人から30人程度の討論形式のものが殆どで、チュートリアルはゼミで学んだ内容について理解を深めるための補助的なものになっているという違いがあります。実際にこのような授業を体験してみると、学部生向けの授業では、チュートリアルが多いためにごく基本的な点についても踏み込んだ質問をする機会が保障されており、他方で、大学院の授業では討論を通じて他の学生の見解を糧にできるという点で、かなり合理的なスタイルではないかと思いました。授業内容に関しても、全体としては満足のいくものでしたが、惜しむらくは自らの準備不足で、先生のおっしゃっていることは問題なく理解できても他の学生の英語の聴き取りがスピードや独特の訛りゆえに少し難しく感じるがあったり、また、事前に読んでおくべき資料を十分に読み込めないまま授業に参加してしまったりと、留学前の段階でより入念な対策をしておけばよかったと思うことも少なくありませんでした。

オックスフォードでは、学業以外の面ではカレッジが生活の中心となります。私の所属していたキープルカレッジは、19世紀末に創設されたオックスフォードの中では比較的新しい庶民的なカレッジで、東京駅にも少し似た色調の、ネオゴシック様式の煉瓦造りの建物がシンボルとなっています。クラブ活動が盛んで、私自身は参加しませんでした。とくにスポーツ関連の部は強かったようです。音楽を学んでいる学生も相当数いるためか音楽活動も盛んで、カレッジのチャペルやリサイタルホールなどで度々コンサートが開かれており、折々の行事の際にはカレッジの聖歌隊が賛美歌を披露します。このような正式な音楽活動以外にも、カレッジのメンバーで歌いたい人は誰でも参加でき、学期末にキープルのチャペルでコンサートを行うChoral Societyがあつて、こちらには私も参加させて頂きました。他のBCJA奨学生のご報告にもあるとおり、カレッジにはダイニングホールやバー、ジム、チャペル、図書館、コモンルームなど学生生活に欠かせないものは一通り揃っており、学期中はパーティーや映画鑑賞会などのイベントも学生が中心となって頻繁に開催されています。一学期に一度は、Black Tie Dinnerという正式な食事があり、これは学生にとっては、友人と誘い合って普段よりおいしいものを良心的な価格で頂ける機会でもあるのですが、同時にマナーを弁え社交性を養うという意味において実社会へ出て行くための準備ともなっているのかもしれないと思いました。住まいはカレッジから歩いて五分くらいのところにある寮

でしたが、こちらも国際色豊かで、時に生活習慣、食習慣の違いに驚きながらも、楽しく過ごさせて頂きました。また、私の場合は、カレッジの友人に誘われて一般市民の訪れる教会での行事や聖書の勉強会に参加させて頂いていたため、地元の方に茶会や食事に呼んでいただいたり、キリスト教についての素朴な疑問についてクリスチャンの方に伺ったりする機会があって、多少はイギリスの文化や習慣について身近に感じる事ができたように思います。

一年間というのは、見知らぬ土地に住んでその社会や文化を理解するには必ずしも長い期間とはいえず、実のところ、おそらくイングランド法の勉強という側面だけをとってみても、未だに表面的な理解に止まっていると思われる点、興味はあってもこの一年間では殆ど勉強できなかった分野などが沢山あり、これは今後の研究活動において地道に克服していくべき課題であると認識しております。それでも、今後の研究の一つの基礎としてイングランドの貿易取引法を学び、その背後にある法政策的な根拠とイングランド法の発想を知るという当初の目標は、一応は達成できたと考えており、現在は京都にて、留学前からの研究の延長として、しばしば実質的な国際標準となっているイングランド法あるいは米国法との関連で日本法における貿易取引の規整を分析するという課題に取り組んでおります。また何よりも、一大学院生として、多様な国から優秀な学生の集まるコースに参加できたことで、単に知識を得るだけではなく様々な観点からの見方に触れることができ、この経験は、比較法を避けて通ることのできない私の今後の研究にとっては、大きな糧になるであろうと信じております。最後に、改めて私を支えてくださった方々に感謝し、この報告が今後イギリス留学を考えておられる方にとって少しでもお役に立てることを願いつつ、報告を終えたいと思います。[2007年1月寄稿]

(2005年度 BCJA 奨学生、Keble College, Univ. of Oxford、国際商法)

2005年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[2]

サセックス大学での留学を終えて

高野 良太郎

1. 留学までの経緯

私がイギリス大学院への留学を考えたのは、自分の専門性を変えたいということと、国際的に通用する学歴を得たいこと、そして将来のキャリアを考えてのことでした。大学を卒業してからすでに6年程度日本で働き、28歳になり、今まで専門だった理系とはまったく別の分野で留学しようとしていた私には、なかなか利用できる奨学金も無く、全て自費で行くことを覚悟していました。そんなとき BCJA からの奨学金授与の知らせが届き、本当にうれしかったことを覚えています。実際的な意味よりも心理的に、自分の留学を応援してもらっている、奨学金の審査に受かる事ができた、ということに非常に心強さを受けたのだと思います。BCJA の皆様には本当に感謝してもしきれないと思います。

2. サセックス大学

私の留学したサセックス大学は、ロンドンから南に電車で1時間ほど行ったブライトンの町の郊外にあります。留学前にもヨーロッパで2年ほど働いていたので、それほど生活に違和感が無かったのですがやはり物価が高く、当時ポンドもどンドン円に対して値段が上がっていたので生活が苦しかった覚えがあります。

サセックス大学には理系・文系ともに多くの学部及び大学院があり、理系の大学院に留学している日本人の方も何人かいました。大学院の中でも Institute of Development Studies, IDS が最も有名かと思います。IDS は開発学のメッカとして、多くの研究者や国連、NGO 職員などの実務家を輩出しているそうです。

3. SPRU について

私は発展途上国での勤務経験を生かし、開発学の実務を学びたかったので最初は IDS を志望していたのですが、やはり大学までの専攻が理系だったことと、その後の実務経験もほとんど開発とは関係の無い分野でしたので、サセックス大学の受験アドバイザーの方から（正確なタイトルは覚えていませんが、そういった方が毎年冬に来日され、ブリティッシュカウンシルで相談会をされるようです）「IDS よりも SPRU を受けたほうがよい」というアドバイスを頂きました。SPRU は Science and Technology Policy Research Unit の略で、日本語だと科学技術政策大学院になるかと思います。理系での知識を生かし、尚且つ政策分野に関われるということで、こちらの大学院を受けることにし、幸いにも合格できました。

SPRU では大体毎年4、5つのコースが開設され、私はその内のひとつ、“Science and Technology for Sustainability”を受講しました。これはもうひとつのコース、“Public Policy for Science, Technology, and Innovation”とかなり重なるコースで、環境、科学、技術、イノベーションのための公共政策について学ぶコースです。これらのコースとは別に、よりイノベーション・技術・ビジネスに重点を置いたコースもいくつかあります。それらのコースでは、実際に企業への技術コンサルティング体験もします。

SPRU のマスターの学生は全部で60人ぐらい、そのほかにドクターの学生も20人ぐらいいました。1年マスターで、最初の学期は基礎を学ぶためにひたすら講義を受けて、最後にテストも受けます。2学期目は選択科目から2科目を選び、最後に5000字のタームペーパーを2本書きました。3学期目はあまり授業が無く、修士論文に取り掛かることになります。標準的には8月いっぱいぐらいで修士論文を書き上げ、提出して大学院を離れることにはなりますが、私は就職活動の都合で7月上旬には日本に帰りました。

大学院の学生は先進国からが3分の2、その多くはヨーロッパからで、後が中進国からの学生という印象でした。政府の職員、企業のマネージャーなどに混じって学部を出たばかりの学生も学ぶという環境で、お互い刺激し合えてよかったのではないかと思います。私も特に中国、台湾、韓国などの学生の熱心さに多くを学びました。

授業は、私にはやはり経済学など関連した学問を学んだ

ことが無いこと、アカデミックな世界から遠ざかっていたこと、また英語の壁もありかなり大変でした。特に最初の学期はずっと勉強ばかりしていた気がします。また修士論文も途中までイギリスにいて最後は日本で書き上げたため、資料がどこかに行ってしまうたりして大変でした。やはり一箇所に留まって集中的に書き上げたほうがよかったですと思います。特に一度社会に出てから長い人は、論文の書き方など忘れていたことも多いので、イギリスに行かれる前に大学時代の論文の書き方の本などを読んで行かれるといいかと思えます。英語に関してはやはりヨーロッパ系の人々にはなかなかかかいません。どれだけ準備しても、ディスカッションなどについていくのは大変だと思います。

4. その他生活について

他の方も住環境について多く書いている方が多いですが、ブライTONはロンドンほど家賃が高くなかったのですが、それでも東京都心ぐらいの値段がします。そしてクオリティも低いです。最初の学期は大学の寮に住んでいたのですが、同居人、学部生の騒音に悩まされて街中の大学院生だけのフラットに引っ越ししました。若い方は毎日パーティーがあるような環境も楽しいかと思いますが、静かなのが好きな方はかなり慎重に選んだほうがいいです。といっても行って見ないとわからない面も多いので、まずは大学の寮などに住んでみて不満だったらなるべく早めがいいところに引っ越ししましょう。勉強に集中できないと精神的に大変です。でもうるさいところでも楽しくやっていた人も多いので、本当にこれは人の性格によると思います。

社会人から留学する方は、なぜ大学院に行くのか?とか、お金のこと、年齢的なこと、キャリアのこと、色々悩まれることも多いかと思いますが、いい経験になることは確かだと思います。私は日本に帰国して大学院で学んだ内容に近い仕事ができる政府系の機関に就職し、留学の経験を一応生かせたと思っています。[2007年1月寄稿]

(2005年度BCJA奨学生、University of Sussex、科学技術政策)

2005年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[3]

歴史の中で暮らす街、ケンブリッジ

大牟禮 宏美

まずはじめに、BCJAの皆様方に心より御礼申し上げます。奨学金を研究費に当てることができたことはもちろんですが、『British Council Japan Associationが認める学生』という大きな信頼を賦与していただいたお陰で、学生生活中やその後の進路を決めるにあたって大きな助けとなりました。本来ならば直接伺って御礼を申し上げるべきなのですが、海外生活を続けていることもあり、文面になる失礼をお許しいただければと思います。

私は2005年10月から1年間、ケンブリッジ大学教育学部の『政治・民主主義と教育』という修士コース(Politics, Democracy and Education: PDE)にて1年間学びました。私の本来の専門は教育開発です。ケンブリッジ大学に入学する

前には、千葉にあるアジア経済研究所の開発スクールIDEAS(アイデアス)にて開発学のディプロマを取得しており、イギリスでは教育に重点をおいたコースを選ぶことを決めました。イギリスにはIOEやSussex大学など、教育開発におけるトップクラスの学校があります。そんな中、開発分野と関わりの薄いケンブリッジ大学教育学部を選んだのですが、コースを終了し実務に携わる今、自分の決めた選択は間違いではなかったと、1年間の経験に非常に感謝しております。

PDEでは、政治学・社会学・経済学・哲学・歴史学と多方面から教育学をみていくという特色があります。ケンブリッジらしさでもあるのかもしれませんが、実務からは程遠く、とても理論的な構成になっています。そして、私にとってそこで身につけることができた一番の収穫が、“Critical Thinking(批判的思考)”だったと思います。多くの哲学者・歴史学者・教育学者の考えを学び、議論を重ねることにより、現在耳にする様々な理論に対して、現象に対して、多元的に批判し考察する視点を鍛えることができました。「実務に携わっていると、毎日の仕事に追われて、自分の開発に対する姿勢や哲学などを考える余裕や機会はなかなか無いよ」というアドバイスをIDEASの先輩にいただいたことがあったのですが、留学中にベースとなる理論の部分をしっかり鍛えることができたことは、実務に携わる今となってとても感謝しています。

ケンブリッジの魅力は、自分次第で広がる機会の多さにもあったと思います。講義は週たった4時間(2時間×2)、残りの時間の使い方は個人の裁量に任されています。「時間が有り余って手持ち無沙汰になるのでは?」というような印象を持たれる方もいらっしゃるかもしれませんが、授業のためのリーディング、論文の個別指導、教育学部やその他の学部で開かれるセミナー、語学やコンピュータのクラス、コレッジ主催のイベントやサークル活動など、自分の予想以上に忙しい毎日を過ごした記憶があります。また、ケンブリッジ大学学生であるということで、フランスやイギリスで開かれる国際学生会議へ招待されることなどもあり、知名度の高い大学ならではの恩恵にも与ることができました。

もう一つ、言及すべきことは、ケンブリッジ大学と街の美しさではないでしょうか。歴史ある建物の魅力はもちろん、由緒ある図書館、ケム川をくぐるバンティングの楽しさなど、その魅力は枚挙に暇がありません。学生ならではの楽しみの一つに、各コレッジで頻繁に開かれるフォーマル・ホールという晩餐があります。アカデミック・ガウンを身につけた学生や教授が集まり、サロンでの食前酒、ラテン語の挨拶とドラムの響きから始まる歴史あるダイニング・ホールでのフルコース・ディナー、コーヒーを楽しみながらの食後の集い。各コレッジごとに料理の質も違えば、建物の作りや着席の方法も違います。ケンブリッジならではのこのフォーマル・ホールは高いコレッジでも10ポンドほど。物価の高さに嘆く日々ではありましたが、フォーマル・ホールは本当に価値のある経験だったと思います。

教育開発専門家としてキャリアを築く一環として留学したケンブリッジでしたが、在学中に、希望していた国連教育科学文化機関(UNESCO)でのインターンが決まりました。UNESCOパリ本部の教育セクターの方々からの薦めもあり、とても

活発に活動している南部アフリカのナミビア共和国にあるオフィスにて10月より勤務しております。理解ある上司や同僚に恵まれ、“Education for Sustainable Development”に関わる国際ワークショップの開催など責任ある仕事を任せてもらうことができ、学ぶ日々が続いています。3月から同じナミビアにある国連児童基金 (UNICEF) にて3ヶ月ほどインターンすることも決まっており、最終的にどのような形で教育と開発に関わっていきたいのか、自分の進路を決定する上で非常に重要な経験となることと思います。

来年の夏に行われるケンブリッジ大学の学位授与式に出席する予定です。久々の仲間との再会、歴史あるコレッジめぐり、図書館や植物園の訪問、ケム川でのパンティング…、遠い昔のお伽話のようにさえ思えるあの美しい街に再び訪れることができるのが、今からとても楽しみです。



Formal Hall at Pembroke Collage



Punting at Cam River



King's Collage

[2006年12月寄稿]

(2005年度BCJA奨学生、University of Cambridge、政治学)

2005年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[4]

BCJA 英国留学奨学金授与者近況報告

齊木 臣二

2005年7月3日に渡英後、7日にはロンドン同時爆破事件が起こるなど物騒な中での研究のスタートとなりましたが、現在も Cambridge にて日々神経変性疾患の研究に没頭する毎日を送っております。

1. 留学先：Cambridge Institute for Medical Research (CIMR) について

まず私が2005年7月より在籍している(現在も研究を続行中) CIMR について述べたいと思います。CIMR は University of Cambridge の Clinical School (医学部) の附属施設で、分子生物学的手法により遺伝性疾患 (Huntington 病などの神経変性疾患、1型糖尿病、その他の先天性疾患) や血液疾患 (白血病や凝固異常症)・腎疾患の原因解明・治療法開発を目的としており、臨床業務を行う大学との医師兼医学研究者が40%、基礎医学研究者が残り占めるユニークな研究所です。また CIMR 内に加え、多くのノーベル賞受賞者を輩出した隣接する MRC (Medical Research Council) にも一流研究者が多数在籍しており、気軽に質問・共同研究を行いやすい大変恵まれた環境です。主に内科医・神経内科医として6年3ヶ月のトレーニングをし、傍らで遺伝性舞蹈病と Parkinson 病の研究をしていた私にとって、治療に結びつく可能性のある研究を続けることが出来る最良の timing と考え、Professor David C Rubinsztein に直接 apply し、今回の留学の機会を得ることが出来ました。

2. 研究について

私の在籍する Rubinsztein's laboratory の main theme は神経細胞内に形成される異常蛋白凝集を特徴とする神経変性疾患 (Huntington 病、Parkinson 病、遺伝性脊髄小脳失調症など) の治療法開発であり、さまざまな培養細胞モデル・動物モデルを用いて autophagy という蛋白分解機構を利用する治療方法に着目し研究を進めております。留学前から治療薬及び siRNA screening という網羅的な解析に必要な疾患動物モデル (ゼブラフィッシュ) の開発を研究テーマにしておりましたが、渡英後に、まず安定的細胞モデルの樹立を行いながら独自の研究を行うことに変更いたしました。研究を開始し約1年半が経過しておりますが、PhD student と共に上記の細胞を用いた網羅的解析を行いつつ、autophagy を調節し、かつ治療に結びつきうる新規蛋白の機能を共焦点レーザー顕微鏡により、生きた細胞をそのまま観察する手法を用いて解析する仕事を行っております。顕微鏡と解析データ・PC と格闘しておりますが、治療に結びつく研究を行うことができることに感謝し、もうしばらく英国にて精進したいと考えております。

3. 印象に残ったこと

私の英語がまだまだ拙いせいもあり、communication の問題はまだまだあるにせよ、日本に比べ大変快適に仕事ができると感じています。在籍する研究室は合計9カ国出身者からなっており、さまざまな英語が飛び交い、加えてイギリス人との accent の違いも相まって、初期は英語聞き取り

に本当に苦労しました。しかしこの会話上の問題点を越えて、CIMR で研究を行うことには多くの優れた点があるように思います。まず第1に研究の originality を重要視する点。どれほど研究が hot で competitive な領域でも、日本で頻繁に行われる鉄銅鉛実験と揶揄されるような人まねの実験を極力避ける傾向があります。ですから originality の高い他の研究者（時にはライバル）の仕事を誉めることも多く、自らの仕事にも本質を理解した上での質の高い originality を常に求められます。論文を書くためではなく、自分らしい考え方・手法を用いて、少なくともいいから着実に真実を明らかにする大切さを学びました。

第2に生活全般でも当てはまりますが、個人主義が確立されていること。研究室では個々が明確な project を持ち、自分の責任で発展させていく流れが重要視されています。仁義なき研究室ではデータの破壊・盗用などがあると聞いていた私にとって、むしろ拍子抜けしてしまうほどの紳士的な振る舞いが CIMR ではしっかりと定着していたように思います。また Boss との discussion を最低でも週に1回のペースで行いますが、新たな仕事（新たな project・PhD student の指導など）を依頼される時にも、仕事を受けるかどうか最終的には個々の研究者の判断に委ねられており、押し付けられることもありません。

第3に内外の一流研究者を招くセミナーが充実していることであり、多くの exciting な presentation に触れることができました。

4. その他

英国footballの2006-2007シーズンは日本人選手がいなくなってしまい大変残念ですが、footballが大好きな私にとって時々観戦するPremiershipの試合は、研究の疲れを癒してくれる最高の楽しみでした。また研究所内でのfootball teamにも参加していましたが、ここでは書くことのできない、生きた”British football English”を学ぶことができたのも、楽しい経験だったと感じています。

最後に臨床医としての考え方・研究への motivation を与えてくださった多くの患者さん、そしてさまざまな面で私をサポートしていただきました先生方・家族・友人並びに奨学金を給付していただきました BCJA の皆様に深く感謝し、お礼を申し上げる次第です。[2006年12月寄稿]

(2005年度BCJA奨学生、University of Cambridge、医療遺伝学)

2005年度BCJA英国留学奨学金授与者からの近況報告[5]

BCJA 英国留学報告：慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスと英国オックスフォード大学・ケンブリッジ大学のオンライン・ランゲージ・エクスチェンジ

岡部 めぐみ

この報告では2005年10月より英国オックスフォード大学・教育学部・応用言語学科・第二言語習得修士課程在籍中にを行った活動について述べます。2006年5月～6月の4週間に渡り、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスと英国オックスフォー

ド大学・ケンブリッジ大学の間で初のオンラインのランゲージ・エクスチェンジを企画実施することに成功しました。

活動のはじまり

この活動は鈴木佑治教授との一通のEメールから始まりました。私は慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスを97年に卒業し、外資系企業に8年ほど勤務した後、2005年10月より英国オックスフォード大学教育学部応用言語学科にて修士留学をしていました。修士論文の題材を検討していた際に、鈴木教授の研究会で千葉商科大学と英国マンチェスター大学の間でオンラインのランゲージ・エクスチェンジを行ったということを知り、この活動がいかにかに語学学習に効果があるかを調べたいと思い立ちました。語学教育も最近はコミュニケーション重視とされてきましたが、実際にその外国語をコミュニケーションのツールとしてネイティブと使う機会が不足していると感じていました。私は、言語はもともと人と人がインタラクティブに作り上げて行くものだと考えており、相手があって初めて生きた言語習得ができるのではと思っております。そこで、このオンラインを活用したランゲージ・エクスチェンジは、ネイティブ・スピーカーと外国語を実践的に活用する良い機会を与えると思ったわけです。修士論文の一環として慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスと英国オックスフォード大学・ケンブリッジ大学のオンライン・ランゲージ・エクスチェンジを行いたいという旨を鈴木教授にEメールしたところ、すぐに快諾のお返事をいただき、当時研究会で修士課程に在籍していた山中司氏をご紹介いただき、2005年10月よりパイロットテストを含めあらゆる側面に置いて協力をしていただきました。

活動内容

このオンライン・ランゲージ・エクスチェンジは課外時間に学生の自主参加をもとに行われました。日本側からは10名、英国側からは8名が参加しました。実際の参加希望者は更に多かったのですが、日本と英国の時差や、学期のスケジュールが異なることなどの理由で全員が参加することはできませんでしたが、予想以上の参加希望者が募り、かなりの高い反響でした。ランゲージ・エクスチェンジのセッションはインターネットを介したビデオ会議システムを利用し、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスと英国オックスフォード大学・ケンブリッジ大学をつないで行いました。一回のセッションは45分間で20分を英語、20分を日本語と区切り、それぞれの言語で会話を一対一で行い、最後の数分間を利用して互いに相手の学習言語に対するフィードバックを行いました。このセッションの形式に対して、「一方的に教えられるのではなく、対等な立場に立つことによって、コミュニケーションが活発に取れたように思う」と参加者はコメントしています。「対等な立場」に立ち、外国語で会話をするという境遇を共有し、そしてお互い助け合うことによって、初対面で、何千キロも離れたところにいる相手であっても、45分間で参加者同士の距離がずっと縮まるように感じました。セッション後のフィードバックはとても有益であるというコメントでした（「英語の発音をほめてもらって自信ができました」、「文法や単語などの細かい部分を相手に指摘してもらえたので、その点に関して上達しそうです」など）。基本的にはセッションの会話内容は通常の会話と同じように決まった

形式は設定されていなかったのですが、事前に相手に尋ねたいと思う質問を考えてくること、自分で選んだトピックについて簡単に発表できるよう準備してくることを推奨しました。

活動結果

参加者の語学レベルによって、このランゲージ・エクスチェンジから得たものは異なったように思います。日本で英語を学び、一対一で継続して 20 分も会話をしたことが無かったという学生は、「文法であったり、時制であったり、冠詞であったり、こういったことは英語において確かに重要である。しかしそれを意識するあまり英語が怖くなるのでは本末転倒である。華美流麗な英語を話す必要はない。身振り手振りも時に交えながら、意思を伝えようという強い気持ちをもつ。これが一番重要であり、これさえ出来れば基本的な英会話は出来る、と気付いた」、「完璧な英語をしゃべる自信がなくても、通じることがわかった」とコミュニケーションを図ろうとする意思の重要性を認識したことにコメントしています。更には、「相手の顔の表情、ジェスチャーを見ながら話せること。教材や大学の授業のように“受け身”で覚える英語ではなくリアルタイムの意見交換を通じてスピーキング、リスニングを鍛えることができた」、「英語の授業に比べて、質問にしても議論にしろ、肩の力を抜いて自然な形で出来る。英会話においてこのことは非常に重要なことであり、その意味で有意義だと思った」、「現地の人と話すことによって、自分が経験していなかったことなどについて議論をすることができた。向こうの人の価値観と自分の価値観の比較をすることができた」、「このプログラムがなかったら、恐らく一生知り合えなかった人と友達になれた」、「現地の学生の方とメール交換をする仲になれた」、などが良かったとコメントしています。



オンライン・ランゲージ・エクスチェンジの様子

活動は4週間と短い期間でしたが、語学学習の言語面においても効果は見受けられました。セッションに 4 回参加した 4 名の日本人学生に対して行ったセッション参加前と後のオーラル・インタビューのデータを比較した結果、測定した流暢さ (fluency)、正確さ (grammatical accuracy)、複雑さ (lexical and syntactic complexity) において全て統計的有意な結果となりました。

このオンライン・ランゲージ・エクスチェンジのメリットとして、外国語を使ってコミュニケーションを図るということに対する自信、自分の抱える課題の明確化、他国の学生との交流の機会、そして更には言語面における効果が挙げられます。また、学生の主体性を重んじた活動としても非常に有意義な内容となりました。[2006 年 12 月寄稿]

(2005 年度 BCJA 奨学生、University of Oxford、応用言語学)

2006 年度 BCJA 会計決算報告書

2005 年 11 月 1 日～2006 年 10 月 31 日

(一般の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	1,421,209
会 費	95,000
利 子	5
合 計	1,516,214

支出の部

科 目	金 額
会場費	100,000
BC 郵送代(668 名)	60,120
振込手数料	735
アルバイト料	50,000
オフィス用品・通信費	2,190
BCJA 印刷代	46,725
合 計	259,770

2006 年 10 月 31 日現在の資産状況

預金 (BCJA)	1,256,444	次期繰越分	1,256,444
-----------	-----------	-------	-----------

(BCJA 奨学基金の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	55,881
郵便振込	1,500,000
利 息	87
合 計	1,555,968

支出の部

科 目	金 額
振込手数料	3,360
奨学金支給	1,350,000
合 計	1,353,360

2006年10月31日現在の資産状況

現金	100,000	次期繰越分	202,608
預金 (BCJA 奨学金)	102,608		

平成18年度 BCJA 奨学基金協賛者一覧

2006年10月31日現在

協賛者総数 86名 総額 1,500,000円
 派遣者数 9名 奨学金総額 1,500,000円

協賛者氏名 (敬称略 順不同) :

矢口 宏	塩田 洋	山下 純宏
河野 豊弘	関谷 透	浜西 千秋
白鳥 令	菅井 直介	我妻 堯
細田 衛士	荘口 博雄	向井 清
権藤 興志夫	古川 宣明	川本 敏
森 亘	諏訪 部仁	早濑 尚文
高柳 和夫	北川 辺信	山口 隆美
平 孝臣	山口 勝巳	北村 俊則
名取 信策	武藤 春光	三井 弘
河野 豊弘	石松 須美子	福田 歛一
山中 健	入部 兼一郎	西村 関也
石井 明	西田 宏子	伊東 治己
小倉 暢之	松岡 芳男	井上 公正
田村 一郎	足立 行紅	能口 盾彦
横山 昭	海光 厚遙	大岩 元
木村 浩	森田 青平	北 政之
池上 忠弘	南方 暁	斎藤 文良
梅川 正美	横川 信治	横山 俊夫
阿部 和彦	島津 幸男	田口 博國
岡村 定矩	矢口 宏	山田 昭廣
宇佐美 誠二	宮脇 富士夫	中山 修一
桐敷 真次郎	荒木 喬	飯野 正光
小島 清	小鍛冶 繁	野口 俊一
中井 晨	山田 和廣	金山 弥平
安藤 奠之	松原 健太郎	倉持 三郎
藤村 正哲	栗本 宗治	塚原 廣雄
町並 陸生	長澤 泰	
村井 康久	西田 宏子	
中島 章	河合 秀和	
木村 孟	安村 典子	

平成19年度 BCJA 奨学基金趣意書

平成19年1月12日

BCJA 会長 西田 宏子

BCJA 会員のご好意で、昨年も9名の新進気鋭の留学生が、英国において、勉学にいそしんでおります。大変な難関から選抜された有為な人材であり、必ずや大きな成果が期待できるものと信じております。

今後も、貴重な英国留学の道を確保するため、またこの留学制度に期待している若い諸君に希望を持ち続けていただくため、会員の皆様から、今回も、広くご賛同を賜りたいと願っております。

前回に引き続き、今年度も、より多くの会員の皆様からご賛同を得たいものと、郵便振込でのご送金とします。みなさまからのご厚志を心からお願い申し上げます。

記

一口 5,000円 二口以上で、お願い申し上げます。

郵便振込で、振込額、住所、氏名をご記入のうえ、下記口座宛にお近くの郵便局でお手続きいただければ幸いです。なお、振込用紙は、本ニューズレターに同封させていただいたものをご利用下さい。

口座記号番号：00180-0-426794

加入者名：BCJA 奨学基金

事務局 島津幸男 秘書 川崎

〒102-0082 東京都千代田区一番町3-3

ニッセイビル9F (株)ビーユー

連絡先 Tel： 03-5211-3855

Fax： 03-5211-3858

e-mail：yukio-s@mvno.co.jp

BCJA の銀行口座のお知らせ

金融機関名： UFJ 銀行

支店名： 飯田橋支店 (664) (03) 3268-4131

科目： 普通

口座番号： 3654677

受取人名： BCJA 島津幸男

要注意!

総会参加費等、BCJA への振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

振込先 : ビーシージェイエー (BCJA)

BCJA ホームページについて

ホームページ担当

BCJA のホームページ <http://www.bcja.net/>では、過去のニューズレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内、掲示板などがご覧になれます。より良いサイトにするため、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せ下さい。(メールアドレス m-aoyagi@aist.go.jp まで)



[編集後記]

BCJA ニューズレター23号では、BCJA 英国留学奨学金 2006 年度選考結果報告、2004 年度および 2005 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告 6 件、会計報告などを掲載することができました。原稿をお寄せいただいた方々に大変感謝いたします。

本レターへの寄稿が最近ほとんどありません。皆様の研究・事業活動のご紹介、英国との交流事例、最新の英国事情、留学体験談など、よろしくご投稿をお願いいたします。一度、原稿をお送りいただきました方々にも、続報をぜひよろしくお願ひいたします。また、特集テーマ、原稿依頼の案、紙面構成、編集方針などのご意見も積極的にお寄せいただければ幸いです。なお、本レター発送については、会計担当の島津様にご協力いただきました。この場を借りて、心より感謝いたします。

(青柳昌宏、独立行政法人 産業技術総合研究所、National Physical Laboratory 1994-95, m-aoyagi@aist.go.jp)

